

世界大学が目指す人間教育と理想の人間像(3)^{*}

— ワーズワースの精神の神髄 —

森 谷 峰 雄

自然の叡智

I

彼は、人間としては当然であろうが、自分が生れ、生きた地球・自然に愛着を覚えている。そもそも、人間は土から造られたのである。それゆえに、自然・地球に無限の affinities を覚えてしかるべきである。また、終には我らの肉体はこの自然に帰っていくのであるから、自然・地球はまさに我らの一部、我らは生物であるけれども、死すれば無生物となる。この骨も肉も血も、すべて、大自然へと帰っていく。人が生きている間に、そのまことの有様を感じ取れば、この世の虚しさを感じ、創造主にますますの愛を覚えることであろう。ワーズワースの自然愛は、深くはここに由来するのである。自然をめぐる愛ではない。日本的な風流からくるのではない。心の清い人が感じる人間観、自然観である。

Yet were I grossly destitute of all

Those human sentiments which make this earth

So dear, if I should fail, with grateful voice

To speak of you, Ye Mountains and Ye Lakes,

And sounding Cataracts! Ye Mists and Winds

That dwell among the hills where I was born.

(II, 437—42)

(だが、それでもやはり、私が感謝に満ちた声で、

君たち、山々や湖水よ！

また轟きわたる滝よ！ 私の生まれた山々に住む

君たち、霧や風のことを、こうして語ることがもし出来ないとしたら、

この大地を私にこれほどまでになつかしいものにしてくれる人間的感情が、

私から、あらまし奪いとられてしまうことになるだろう。)

* 本論は1989年7月16日、小牧久時平和財団・世界大学・フランス国際大学・地球みどりの会連合主催「絶対平和への四段階連続公開講座」第四回分科会講座（世界大学講座シリーズ2—）で発表されたものに補足したものである。

ワーズワースは生れたままの純真な心を一生保持し得た数少ない人間であった。これこそ人間のあるべき姿の模範であろう。人は何故くだらない名誉とか、富とか、低次元の欲望に振り回されるのだろうか。人間存在の危機、人は（すべての生きものは）自然の一部であり、その体は土と変わらず造られて生きているものである、そして、その原因は神にあるということに悟れば、自と神を愛し、この世的な価値を卑しむことになるだろう。そこまでいかない人間は真に浅薄で、哀れであり、虚しい生涯を送ることになるだろう。ワーズワースはこのように、人間存在の危機の有様を感じ得た人間である。繰り返すが、その真実の人生のあり方を詩人に教えたのは、神の被造物なる自然であった。

彼の神への信仰の特徴は、極めて客観的な実直性になる。これは極めて、健全です。それは、自然が神の御旨の通りに働き、作用し、機能して生きていることを彼が学んだためです。自然の教えの通り、その直観的真理を守れば、彼は神の摂理からそれることはない。彼は必ず、様々の異端的思想また、人間的欲望に惑わされずに、一直線に神の道を歩んでいくことができる。しかるに、このような尊い自然から離れた人間は、神の健全な真理を見失い、人間の世界にのみ通用する狭い価値観に支配されてしまい、いつの間にか、本当の真理から墮落してしまう。ワーズワースはこのような人間の群れを周囲に観察したのであった。人間は自然から離れると、いかに迷い出るものであるかを教えている。

If, in my youth, I have been pure in heart,
If, mingling with the world, I am content
With my own modest pleasures, and have lived,
With God and Nature communing, removed
From little enmities and low desires,
The gift is yours. . . . (II, 443—48)

自然は本来喜びである。すべては歓喜に輝いている。特に、心の純真な人間は自然の中に、純粹の喜びを見出すことができる。このように、自然界と人間は生命的交歓を交流することが出来る。また、自然の方も心の純真な者に接すると、喜びを感じる。不思議な霊的交流である (III, 118—20)。ワーズワースの交流は生物—動植物だけでなく、無生物界に及ぶ。

To every natural form, rock, fruit or flower,
I gave a moral life, I saw them feel,
Or liked them to some feeling; the great mass
Lay bedded in a quickening soul, and all
That I beheld respired with inward meaning. (III, 124—28)

(私は岩や果実、花、あるいは路上にちらばる小石にいたるまで、
一つの精神的な生命を感じ、それらに、
心があるのを観てとり、またそれらの一つ一つを
ある人間的感情にぴったりと結び合わせた。こうして事物の巨大なかたまりは
いまや、いきいきとした一つの魂となって存在するものとなり、
目に見える一切の事物が、内面の意味をになって息づくのであった。)

この詩は日本の純真な詩人八木重吉に共通しよう。

石くれ

石くれを ひろって	ややありて
と視 こう視	こころ 踊れり
なげくばかり	されど
ひとつの いしくれを みつめてありし	やがて こころ おどらずなれり

A Stone

I picked up a stone	After a while
At which I stared	My soul danced
All eyes	But stopped
As if about to cry.	Soon after. Tr. by Mineo Moritani

鉱物界にも、人間の気持が及んでいる。神の立場に立てば、鉱物も植物も動物も本質的な区別はない。自由に鉱物を生きものに変えることができる。ペトリファイド・フォレストの鉱物から芽が出て来るといふ。また、岩石の中には蛋白質があるという。結晶体を持つ生きものもいふ。創造の秘義がここに隠されている。神の創造も土からで、キリストがラザロを生き返らせたのも、無生物界も生物界も、神のめにおいては、大きな相違はない、ということでしょう。彼にとって重要なのは、生きた人間の魂が美であること、墮落していないことです。我らの体も無生物から成り立っていることの意味をよく考えていきたいものです。命を与えられている間に、この命の正体をよく考えるべきです。

人間の魂は、もちろん全宇宙の生命、一なる存在者に帰する。幼児の魂は無垢にして、清く、そのままにして、天の御使いと話をしているのです。しかし、この魂は人間の身体的成長と共に、人の心に様々な意識が生じ、墮落するものもあれば、それを留めて、ついに、天使に到るものもあります。このような、魂の成長こそ、何よりも重要であると、詩人は考えている。

O Heavens! how awful is the night of Souls,

And what they do within themselves, while yet

The yoke of earth is new to them, the world

Nothing but a wild field where they were sown.

(III, 178—81)

(ああ！ それにしても、何と偉大なのだろうか、人間の魂の力は。また、たとえ地上のかせがまだ身にそぐわないものであっても、たとえこの世界が魂にとって蒔きつけられた荒地にすぎなくとも、この人間の魂が内面に成就することがらの、なんと偉大なことだろう。)

魂こそ、不朽の価値がある。たとえ、この世は“the waste land”であったとしても、人間の魂は神の似像性に帰するが故に、最も尊いのである。しかし大学教育はこのような魂の発展に必要な科目を考えず (III, 415—31)、学生自身も墮落している (III, 455—59; 510—23)。やはり、詩人は自然の中に溶け入って、そこから知恵を得ようとするのである。大学の教師、学生、制度は純真な魂にはむしろ害になっている。ワーズワースの魂の進展は、大学教育においてはなかった。彼は無垢こそは、最も大切なものであると、悟った。それ故に、彼は

And, as for what pertains to human life

The deeper passion working round me here,

Whether of envy, jealousy, pride, shame,

Ambition, emulation, feat or hope,

Or those of dissolute pleasure, were by me

Unshared. . .

(III, 531—36)

(こうして、人生に必ずつきものの、羨望、嫉妬、高慢、恥辱、野心や競争心や、不安や、希望など、私の身邊にひしめいているひとときわ激しい数々の情念あるいは、遊蕩的気分などは、当時の私にはまったく無関係だった。)

ワーズワースの偉大さは、彼の自然教育において得た叡智が、当時の大学の教育の不自然さを悟らせ、人の一番大切なものは無垢であると、知ったことです。無垢こそは、人が神に到達する道であるのだから。そして、この無垢があらゆる学問に優れていること、魂の発展には欠かせないことなどを悟ったのです。実にワーズワースは偉大で、かつ天才的な、また、人類の模範に足る詩人であったと解されます。

II

思えば、何の人間味もない、言ってみれば、峻厳なる自然の中に喜びを見出すことのできる詩人の魂は、言うまでもなく、神と平和の心を得ています。その魂が善良なる人間に接する時はその喜びと同情に等しく、より甘美なものでしょう。ここに、人間の自然とは異なる独特の麗しさが存在する。第四巻の初めで、詩人はその一例を語っています。

Glad greetings had I, and some tears, perhaps

From my old Dame, so motherly good

While she persued me with a Parent's pride.

(IV, 16—18)

(うれしい出迎えの挨拶をうけ、なかでも善良で

母親のようなあの老婦人は、涙を流していた。

そして、生みの親のように誇らしげに、私の姿を仔細に見つめるのだった。)

大学生となって、帰省した詩人を出迎えたときの嬉しさがある。ワーズワースはこの人の恩を感謝してその思い出を語っているのです。

The thoughts of gratitude shall fall like dew

Upon thy grave, good Creature! While my heart

Can beat, I never will forget thy name.

Heaven's blessing be upon thee where thou liest.

(IV, 19—22)

(ああ、あの善良な人よ！ いま、そなたの墓のうえに

私の感謝の心を、露のように注ぎたい。

この私の胸が鼓動している限り、私はそなたの名前を忘れることはあるまい。

その場所の上に神のみ恵みの豊かならんことを。)

人間の善良性に他の人格の善良性が触れた時の喜びは天上の喜びであります。天国での再会はこのような喜びの再現でしょう。善良な人間の魂は自然よりも、もっと大きい喜びを詩人に与える。次の行はワーズワースの理想の人間観がよく現われているところです。

Her domestic life

Affectionate without uneasiness,

Her talk, her business pleased me, and no less

Her dear though shallow stream of piety

That ran on Sabbath days a fresh course.

(IV, 213—17)

(彼女の少しも気づまりなところのない、ひたすら
温かい思いやりにみちたその平穏な家庭生活、彼女の話、する仕事、
わけても安息日になるとますます新鮮な水路を流れるような、
浅くとも、清らかに澄んだ、あの信心深いところの流れは、
ひとしお私の心を明るくしてくれたものだ。)

ワーズワースの理想の人間像は信仰があり、心の純真な人です。かかる人が彼の心を喜ばせる。従って、この高貴で純真な魂、信仰こそが人間の本質であって、これが人間になれば、その人はスウェーデンボルグ流に言えば、人間の形をした獣です。このことはワーズワースは次のように書いている。

Something there was about me that perplexed

The authentic sight of reason, pressed too closely

On that religious dignity of mind,

That is the very faculty of truth;

Which wanting, either from the very first,

A function never lighted up, or else

Extinguished, Man, a creature great and good,

Seems but a pageant playing with wild claws. . . .

(IV, 295—302)

(理性の真の洞察力を曇らせ
精神の持つあの宗教的尊厳、
真実なものが備えるあの特質を、
徹頭徹尾、圧迫するような何かが私にはあったのだ。
ところが、もし、そうした尊厳が初めから失われていて、
その機能がまったく作用できなかったり、そうでなくて、
途中で消失してしまったりすれば、偉大で優れた被造物としての人間は、
醜悪な爪を持った見かけ倒しの木偶の坊となり (後略))

大学教育はこのような堕落傾向の精神を矯めるところである。しかし、先述の通り、大学は堕落の世を改革するどころか、かえって、この世と協調することのみを教える。従って、ここからは予言者的精神は決して大学の教育からは出てこない。否、そのような精神を妨げている (IV, 292—94)。そのような危機の魂を救ったのは自然の荘厳さであった。ワーズワースはこれによって、人間の自覚、人格の完成の予感を得たのである。

Magnificent

The morning was, a memorable pomp,
More glorious than I ever had beheld.

.....

I made no vows, but vows
Were then made for me; fond unknown to me
Was given that I should be, else sinning greatly,
A dedicated Spirit.

(IV, 330—44)

(だがその朝の

なんと壮麗であったこと。それまでに一度も見ただことのないほどに
輝きわたり、それはじつに生涯、忘れがたい壮観だった。

.....

声に出して誓いはしなかったが
その時、はっきりと誓いがなされたのだ。自分にもわからない契りが、
とりかわされたのだ。自分は、必ず、神聖な魂にならなければならず、
もしそうでなければ、重大な罪を犯すことになるのだと。)

この精神は、神の創造の精神と同一である (I experienced in myself / Conformity as just as that of old / to the end and written spirit of God's works") (IV, 356—59)。この意味において、ワーズワースはヘブライの予言者の系列にある者としての位置を占める。(彼自らが、"a dedicated Spirit" になる、この考えは極めて正当なる人間観である。ミルトンの、*Reason of Church Government* にあるように、自分自らが浄められ、キリスト・イエズスの御魂に同質化されるほどになること、これが人間のまことの生き方である。あらゆる学問・知恵・知識はまさに、人間がこのようになることのために用いるべきである。このようにして、人は魂の完成を得て、天に帰り、永遠に生きることになる。永遠の叡智を求めることこそ、人間の本来の生き方である。それを、妨げるものから、遠ざからなければならないことは言うまでもない。

III

この考えは靈魂不滅の考えと同じである。ああ、人間の魂の偉大さ、あるいは、人間の本来の性質といった方がよい。というのは、人間は墮落して、このような、人間の本来の目標を忘れているからである。自分一個が、"A DEDICATED SPIRIT" になることが、人生のすべての目標である。第五巻に至って、詩人は一転して人間存在の悲哀を歌っている。T. カーライルの言葉で言えば、彼は「悲しみの至聖所」⁽¹⁾ に近付いているのである。

Even in the steadiest mood of reason, when
All sorrow for thy transitory pains
Goes out, it grieves me for thy elate, O Man,
Then paramount Creature! and thy race, while ye
Shall sojourn on this planet. . .

(V, 1—4)

(人間よ、そなたのしばしの苦痛に対する、一切の悲哀は
氷解するだろう、もし理性をできるだけ、しっかりと働かせさえすれば
だが、その時ですら、おお汝、最高の被造物よ！
そなたが、この地上にとどまる限りの
そなたの境遇、そなたの営みは、やはり私には悲しいのだ。)

「悲しみの至聖所」はすべての心の純真な人の入るところである。日本人の詩人もこれを歌っている。

「貫ぬく 光」
はじめに ひかりがありました
ひかりは 哀しかったのです
ひかりは
ありと あらゆるものを
つらぬいて ながれました
あらゆるものに 息を あたえました
にんげんのこころも
ひかりのなかに うまれました
いつまでも いつまでも
かなしかれ ^{いわわれ}と祝福れながら

八木重吉詩集より

この哀しみは永遠性を思うところから生ずるといってよい。換言するならば、魂の救われた者が、この世の一時性を認識する時の感情である。その他の哀しみであれば、ワーズワースが歌っているように、理性の力でなくすことができる。この哀しみは魂が救いに入る必然的な一過程である。⁽²⁾

上辺を飾る学問知識は、この地球の消滅と共になくなってしまう。滅ぶべき知識と不滅の知

(1) 森谷峰雄著『キリスト信仰と英米文学』(シオン出版社、1988)、pp. 94—96.

識を混同してはならない。滅ぶべき知識は人間の内部からくるものであってそこには善はない。真の知識とは神からくるものである、本人がそれを意識するしないに拘らず。ワーズワースが悲しんだのは、真の知識が滅ぶのではないかと思った時である。

for those palms achieved

Through length of time, by study and hard thought,

The honours of thy high endowments; there

My sadness finds me it fuel. (V, 7—19)

(長い年月をかけ、研さんときびしい試作のすえにかちとったあの栄冠、
励みに励んだすえのあの榮譽、そのゆえにこそ
私の悲しみは、いよいよ煽りたてられるのだ。)

And yet me feel, we cannot chuse but feel,

That these must perish. (V, 20—21)

(とはいえ、結局、そういうものも消滅するに違いない。そう
われわれは予感し、またそう感じないではいられないのだ。)

A thought is with me sometimes, and I say,

Should earth by inward throes be wrenched throughout

Or fire be sent from far to wither all.

Her pleasant habitations, and dry up

Old ocean in his bed lift singed and bare. . . (V, 28—32)

(時折、ひとつの観念がひらめいて、私は思うのだが、
もしこの地球が、内部からの陣痛のためにねじれ裂けたとしたら、
あるいは彼方から劫火が燃えさかり、生きとしいけるものを
なめつくし、太古からのわだつみも、底の底まで
ひからびさせ、何ひとつのこさず、焼き尽くすことになったら…)

このようにワーズワースの心は無常感に襲われる。詩人は永遠の観点から考えている。ここでの、彼の中心思想は靈魂不滅である。人自ら“immortal being”(V, 22)であるのだ。まことに真理を悟った魂は神に永久に祝福されて生き続けるであろう。まことに、生ける神の御子の魂と接したならば、彼は真に死ぬことはない。すべての学問はこの人間の叡智を獲得するためにある。学問でなくとも、人間の生活全般がこの叡智に到る過程であると言って、過言ではない。たとえ、この地球が消滅しても、人の魂は、叡智に到達した魂は生き残る。(“yet would

(2) 以下は1988年5月9日に、第3回国連軍縮特別総会シンポジウムにて、筆者が『宇宙の完成』と題して発表した一文に載せてある。

the living presence still subsist / Victorious" (V, 33—34)。それゆえ、人は全く不安になる必要はない。以上において、ワーズワースは、非常に重要な学問知識論を述べているのである。このように、考える詩人自身は救いの中に入っている。このことについて、少し、考えてみよう。

スウェーデンボルグは、次のように述べている。

To think thus while thinking from what is present is to think at the same time from what is eternal; and when a man so thinks, and at the same time he lives, then the Divine Proceeding with him, that is, the Divine Providence, regards in all its progress the state of his eternal life in heaven, — and leads him to that state.

(Swedenborg, *Divine Providence*, p.39.)

(現在あるところのものから、このように考えることは、同時に永遠であるものから考えることでもある。人がこのように考える同時にそのように生きる時、永遠の過程は彼と共にある。すなわち、永遠の摂理は、魂の発達において、天の永遠の生命の状態を顧みる。そして、彼をその状態に導く。)

概念的にのみ永遠を考えるのではなく、実際にそのように、生きる人こそ永遠の命のある人である。学問もこれと同じであって、一は、真理愛のために為し、他は飾りのために為す。そのような二種類の人間の存在について、スウェーデンボルグは書いている。

I may relate how the case is, in the other life, with the learned who acquire intelligence by their own meditation kindled by the love of knowing truths for the sake of truths, thus for the sake of uses apart from worldly considerations; and how the case is with those who acquire intelligence from others without any meditation of their own, as is the practice of these who desire to know truths merely for the purpose of acquiring a reputation for learning, and of thereby attaining honour or gain in the world, and consequently not for the sake of uses apart from worldly considerations.

(真理愛のために—それゆえに、世間の名声から離れた有用生のために—真理を知る愛によって点火された彼ら自身の瞑想によって、知性を獲得する知識人と、自分自分の瞑想によらず、したがって、学識の名声を獲得し、それによってこの世の名誉あるいは利益を得るためにのみ—したがって、世間的な考慮から離れた有用のためではない—真理を望む人々の常の慣わしのように、他人から知性を獲得する人々が、他生において、どのようなかを述べてもよい。)

真理愛のために、真理を尊ぶ者と、名声などを得るために知識を得る者との二種類ある。前者はその魂が知恵そのものであって、祝福される。後者は無知のままの状態である。特に、後者について、

... they lamented that they now led a miserable life, because they had studied these sciences for no other end, and thus had not cultivated their Rational by means of them. Their speech is slow and muffled.

(ibid., p.16)

(…彼は惨めな生活を送ってきたことを嘆いた、なぜならば、彼らはまさにこの（訳註：富、名声、など）ために、これらの科学を学び、科学によって彼らの理性を啓蒙してこなかったからである。彼らの言葉はゆっくりしていて、抑えられている。)

学問知識は心の清らかさに劣るのだろうか。もっとも、スウェーデンボルグがここで言っているのは、真理愛の故に学問を追求するのが、最もよいということであろう。学問があっても、それが純粹の目的によって為されていない時、心は無知の状態である、という。それでは、無学にして、否、白痴にして、心の清らかなものはどうか。これは真に、深刻な人生経験の課題である。しかし、ワーズワースはこの問題に明確な答えを出している。心の清らかさを欠いた博士よりも、白痴の方が神に近いと歌っている。J. R. Watson の *The Idiot Boy* の解釈において、それを見出すことが出来る。

The simple happiness of the four travellers, out in the night with the owls, is contrasted with the normal restraints of reason, especially those shown by the doctor when he is knocked up in the middle of the night. He is questioned by Betty about her idiot boy: she has lost him, and does the doctor know where he is? Not unreasonably, the doctor goes back to bed; it is, after all, hardly a medical emergency. Yet Wordsworth explores the serious side of the comic situation, and indicates just how much human love the doctor is missing. The joyful reunion of Johny and his mother, and the spontaneous recovery of Susan Gale, are evidence of a power of love, selfishness, and healing that the doctor knows nothing about.⁽³⁾

(フクローと共に夜なかに外出した、四人の旅行者の単純な幸福は真夜中に叩き起こされた医者が示した、理性の通常の拘束と特に対照的である。彼は彼女の白痴の少年について、ベティの質問を受ける。彼女は彼を見失ったが、医者は彼が何処にいるか、知っているだろうか。当然のこと、医者はベッドに帰った。それは、結局、緊急の治療ではなかった。だが、

(3) J. R. Watson, *English Poetry of the Romantic Period* (Longmans, 1988), p. 124.

ワーズワースは滑稽な状況の真面目な側面を追求する。そして、どんなに多くの人間の愛情を医者は見失っているかを示している。ジョニと母親との喜ばしい再会、スザン・ゲイルの自然の回復は愛、無私、そして医者が全く知らない治癒の力の証拠である。)

理性よりも、love, selflessnessの方が人に幸福をもたらせる。このように、ワーズワースはこの白痴の少年の中に宝を見出した。彼は最善の人間を次のように書いている、

... men who have never known false refinements, wayward and artificial desires, false criticisms, effeminate habits of thinking and feeling, or who, having known these things, have outgrown them.⁽⁴⁾

(偽りの精巧、我が侭で人為的な願望、偽りの批評、女々しい思考感情を持ったことのない人々、これらを体験したが、ここから抜け出た人々。)

詩人は純真な魂をどんなに愛したことだろうか。このような価値観を持っているので、彼は“madness”の中に“potentially more valuable than sanity”⁽⁵⁾を見出す。Watson から、引用する。

I have often applied to Idiots, in my own mind, that sublime expression of Scripture, that their life is hidden with God.'... I have indeed, often looked upon the conduct of fathers and mothers of the lower classes of society towards Idiots as the great triumph of the human heart. It is there that we see the strength, disinterestedness, and grandeur of love...⁽⁶⁾

(私はしばしば、私の心の中で、あの崇高な、聖書の表現、即ち、「彼らの生涯は神に隠されている」を白痴にしばしば適応してきた…私は本当にしばしば、下層階級の父親や母親の、白痴に対する態度を、人間の心の偉大な勝利として見た。ここにおいて、私達は愛の力、無私、そして壮麗さを見るのである。)

以上見てきたように、心の清らかなことが、すべての全てに勝る。幼年期の魂も、その一つである。ワーズワースは何にもまして、これを愛していた。

our childhood sits,

Our simple childhood sits upon a throne

That hath more sower than all the elements.

(V, 531—33)

(4) Ibid., p. 123; see *Prelude*, VII, 544—77.

(5) Ibid., p. 127.

(6) Ibid., p. 123.

(人間の幼年期、われわれのあの清純な幼年期こそは、じつにあらゆる物質的要素にたまさる一種の玉座に坐っているのだ。)

この幼年期の魂の中に、後世不朽の名作を残す希望があった。

The Poet's soul was with me at that time,
Sweet meditations, the still overflow
Of happiness and truth. . . .

.....

Which also first encouraged me to trust
With firmness, hitherto but highly touched
With such a charming thought, that I might leave
Some monument behind me which pure hearts
Should reverence.

(VI, 54—69)

(詩人のたましいと、さらに甘美な瞑想
幸福感と真実にみちあふれた静かな横溢感とが、
当時の私にやどっていた.....
私が初めて、勇を鼓して、それまで一度も
真剣には取り組まなかった、ある大胆な考え、つまり
心の清らかな人たちが心の底から尊敬できるような不朽の名作を
後世に残したいということを、決然と心を踊らせて
願うようになったのは。)

その純真な心(heart)こそ、神の宿る宮であるからである。

Transcendent peace
And silence did wait upon these thoughts
That were a frequent comfort to my youth.

(VI, 157—59)

(超越的な平和と沈黙、
そうしたものが、私の青年時代にしばしばこころの慰めとなって、
こうした瞑想を待ちうけてくれたのだ。)

このような「超越的な平和と沈黙」(Transcendent peace and silence)こそ、人類普遍の道理である、ということを、スイス、アルプス山中で願っている。

By simple strains

Of feeling, the pure breath of real life
We were not left untouched. With such a book
Before our eyes, we could not chuse but read
A frequent lesson of sound tenderness,
The universal reason of mankind,
The truth of Young and Old.

(VI, 471—77)

(気取りのない心情、

本来の人間生活のもつ清らかな息吹き、そうしたものに
私たち、深く感動せずにはいられなかった。そのような教科書を
目の前において、私たちは人類普遍の道理であり、
老若すべての人の真理である、あの
健全なこころのやさしさという、しきりに繰り返される教訓を、
たえず、読みとらざるをえなかった。)

自然と人生の中にこのような思想を読み取ったこの詩人は何と高尚であることか。かような詩人こそ、人間の模範とすべきである。青春の喜びは正にこのような心情、生き方にあるのである。

the ever-living Universe,

And independent spirit of pure youth
Were independent spirit of pure youth
Were with me at that season, and delight
Was in all places spread around my steps
As constant as the grass upon the fields.

(VI, 471—77)

(永遠に生きつづける宇宙

純粋な青春時代の、一個の独立した精神、
あの季節には、そうしたものが私にあり、
よろこびは、いたるところで私の足もとにひろがっていた、
まるで、のはらをうずめる雑草のように、尽きることなく。

この心は、自然が持つ崇高な魂によって持続させられ、いつまでも止むことがない。

The Spirit of Nature was upon me here;

The Soul of Beauty and enduring life
Was present as a habit, and diffused,
Through meagre lines and colours, and the press
Of self-destroying, transitory things,
Composure and ennobling harmony.

(VII, 736—41)

(大自然の霊は、ここでも、私の頭上に存在したまい、
美の魂と、不滅のいのちとが、ひとつの習わしのように
実在したまい、そうして、貧弱な輪郭や色彩のなかに
ひしめき、打ち寄せてくる、あの自滅的で束の間の
事物のなかにも、やはり、満ちわたらせたもうたのだ、
あの、心の落ち着きと、人間の魂を気高くしてくれる調和とを。)

自然の中にあって、人はその魂を正しく清く保つことができる。この意味において、自然は人間に、霊的な意味においても、なくてはならないものである。この点を、現代的な意味をこめて、J. R. Watsonが明快に論じている。⁽⁷⁾

When Wordsworth writes about nature, therefore, he is doing so in the context of his own beliefs and experience, and of his consciousness of the prophetic role. His writings about nature must not be understood superficially: when he describes nature, as he does in 'Tintern Abbey' as

the nurse,

The guide, the gurdian of my heart, and soul
Of all my moral being. . .

(II. 109—11)

he is doing precise language for a process which he wishes, as prophet, to declare to the world: that in contrast to the mechanical, diseased waste of life that is encouraged by modern urban society, there are ways of living that allow the fuller development of the mind and heart:

Knowing that Nature never did betray
The heart that loved her; 'tis her privilege,
Through all the years of this our life, to lead
From joy to joy: for she can so inform
The mind that is within us, so impress
With quietness and beauty, and so feed

(7) J. R. Watson, pp. 112—13.

With lofty thoughts, that neither evil tongues,
Rash judgments, nor the sneers of selfish men,
Nor greetings where no kindness is, nor all
The dreary intercourse of daily life,
Shall e'er prevail against us, or disturb
Our cheerful faith, that all which we behold
Is full of blessings.

(Tintern Abbey', ll. 122—34)

(ワーズワースが自然について書いているとき、それゆえに、彼自身の信念と経験そして、予言的役割の意識の文脈においてそのようにしているのである。彼の自然に関しての書きものは表面的には理解してはならないのである。彼が自然を描写するとき、『ティンターン寺院』におけるように、

私の心と、靈魂そして私の
すべての道徳的存在の乳母として、
案内人、守護者として……

(ll. 109—11)

自然を描写しているのである。彼は予言者として、世に対して、現代の都会的生活によって増長される機械的、病的、浪費された生活とは対照的に、精神とところのより完全な発達を許す生活の方法があることを、宣言するために、方法のために彼が望む正確な言葉を用いているのである。

自然を愛するものを、
自然はかつて裏切りしことなきことを知りて、われはかく願う。
我ら、地上にありて生きる限り、
喜びより喜びへと導くは自然の恩典なり。
自然はわれらの内心を靈感し、
静穏と美とを印し、高遠なる思想をもって育み、
悪しき言葉も、軽率なる判断も、
利己主義者の冷笑も、真実なき世辞も、
日常生活における物憂き交際も、
凡てわれらを説得すること能わず、
また、われらが日とみに映るもの凡ては祝福に充てりとの
われらの楽しい信念を妨げること能わじ)

— この箇所に関し、田部重治訳（岩波文庫版）を用いる。

現在、地球の環境が破壊され、問題となっている。科学者、教育者、政治家は叡智を自然に充分働かせなければならない。神から来る直感とは人間側の推論よりも優れていることが明らか

になった。この意味で、ワーズワースの自然認識は非常に有益な意味を教えている。

参考文献

テキスト

The Poetical Works of William Wordsworth, ed. Ernest de Selincourt, rev. Helen Darbishier, Oxford University Press, 1968.

Selected Poems of William Wordsworth, ed. with Introduction and Notes, by Roger Sharrock, Heinemann, London, 1964.

William Wordsworth, The Prelude or Growth of a Poet's Mind edited from the Manuscripts with Introduction textual and Critical Notes by Ernest De Selincourt, 1926.

関連研究書（外国語）

Michael Zweig, *The Idea of a World University*, Southern Illinois UP., 1968.

Imanuel Swedenborg, *Divine Providence*, The Swedenborg Society, 1949.

Watson, J. R., *English Poetry of Romantic Period*, Longmans, 1988.

John Milton, *Reason of Church Government*, Yale Prose, vol. one, 1953.

翻訳

ワーズワース著・岡 三郎訳『ワーズワース・序曲』, 国文社, 1983年。

ワーズワース著・豊田 実訳『ワーズワースの詩』, 北星堂

ワーズワース著・田部重治訳『ワーズワースの詩集』, 岩波文庫, 昭和39年。

コメニウス著・鈴木秀勇訳『大教授学』1—2, 明治図書出版, 1962。

A マーチン著・森谷峰雄編訳『ワーズワースの宗教』 仏教大学通信教育部, 1987。

ヘレン・ダービシャー著・齊藤 光訳『ワーズワース』, 研究社, 昭和54年。

関連邦文研究書

栗山 稔『ワーズワース「序曲」の研究』, 風間書房, 昭和56年。

岡地 巖『ワーズワースのルーシー詩篇鑑賞と研究』, 開文社, 昭和37年。

佐藤 清『WORDSWORTH』, 研究社, 昭和55年。

前川俊一『若きワーズワース』, 英宝社, 昭和55年。

森谷峰雄「世界大学が目指す人間教育と理想の人間像①」『仏教大学人文学論集』23号。

森谷峰雄「世界大学が目指す人間教育と理想の人間像②」『仏教大学研究紀要』74号。

森谷峰雄『キリスト信仰と英米文学』, シオン出版社, 1989年改訂版。

その他の関連図書

八木重吉詩集, 弥生書房, 昭和40年。

聖書, 日本聖書刊行会, 1984年。